

小山田与清旧蔵書のゆくえ

——附 〈翻刻〉早稲田大学図書館蔵『明治四拾年六月調 高田氏寄託図書目録』——

梅 田 径

一 はじめに

小山田与清（一七八三—一八四七）は、江戸時代後期に活躍した和学者である。実父は田中本孝。水運業を営む高田家に養子に入ってから、学問の道を志し、村田春海を師として和学を学んだ。屋代弘賢、村田了阿ら多くの国学者たちと交流を持ち、華頂宮尊超入道親王に仕え、水戸彰考館にも出仕する。生涯に渡って集書と考證に励んで「擁書倉」（後に「擁書楼」と呼ばれる私文庫を作った。その蔵書は五万巻といわれ、伴信友、屋代弘賢と並んで江戸の「三大家」として名を馳せるに至ったとい⁽¹⁾う。

しかし、子息の与淑は学問に大きな関心を示さず、与清は蔵書の大半を徳川斉昭に寄贈し、その大部分は潜龍閣文庫、即ち

徳川斉昭の蔵書となり、水府彰考館文庫の所蔵となった。寄贈の経緯は『小山田献納紀事』⁽²⁾や西野宣明『松寓日記』⁽³⁾に詳らかである。

与清自身が「蔵書残りなく丸裸二相成候」と述べたように、当時所持していた図書・図版・地図類の大半が寄贈されたことは間違いない。寄贈時の目録は現在も残り、松本智子による翻刻が存する⁽⁵⁾他、彰考館文庫には文庫内で突合整理した際の目録も残されている⁽⁶⁾。

だが、彰考館文庫以外にも、与清の旧蔵書が存している。彰考館文庫に寄贈された書籍に比べればわずかなものだが、なんらかの事情で寄贈をためらった書籍群であり、その中には自筆稿本や索引化作業が途絶した書籍も存する。小山田与清の学業の全体像を考えるためにも無視できない資料群である。

後に詳しくふれるが、小山田与清旧蔵書のうち、まとまった分量を所蔵しているのが早稲田大学図書館蔵高田早苗寄贈本群である。小山田与清は高田早苗の曾祖父にあたる。高田早苗は『半峯書ばなし』（昭和二年、早稲田大学出版部）で、高田家に残された与清の蔵書につき「併し與清翁が家に残された何萬卷かの書物は遂に一冊も無くなり、維新前後家道衰へた當時、私がそろ／＼書を読むべき年齢になった頃には、四書五経さへも満足に家に傳はって居なかった。」と述べていた。しかし、後に高田家の蔵書を寄贈しており、実際にはある程度の蔵書が残されていた。

本稿では高田早苗の寄託書目録を紹介し、高田家に残された小山田与清旧蔵書と、近代に開催された小山田与清旧蔵書の展覽会目録から、潜龍閣文庫に送られなかった小山田与清旧蔵書の行方の一端を明らかにしてみたい。

二 小山田与清旧蔵書の現状

まずは小山田与清旧蔵書の現状を整理しておく。小山田与清旧蔵書をまとまった形で所蔵しているのは現徳川ミュージアム彰考館文庫である。

彰考館には、潜龍閣文庫をはじめ藩校や寄贈図書など多数の来歴の異なる図書が収められていた⁷⁾。大正期に編纂された彰考館文庫の目録に、戦災の難を逃れた図書に圈点で注記を加えたのが、『彰考館文庫蔵書目録 附焼失目録⁸⁾』である。この目録中

に「小山田本」の注記がある図書があり、それが小山田与清旧蔵書とされている。目録を確認する限り、八〇本ほどが焼失を免れていたようだが、実は「小山田本」の注記がない図書にも小山田与清旧蔵書と見られる本が少なからず存している。これには一層の精査が必要であるが、その詳細については別稿を用意したい。

次いで多くの小山田与清旧蔵書を持つのが早稲田大学図書館である。高田早苗による寄託・寄贈書が大半を占めるが、後に購求したものもある。後にもふれるが、寄贈自体は複数度に渡って行われており、妻不二子による寄贈も確認できる。当然その全部が小山田与清に関わるものではない。高田早苗寄贈本群は全て早稲田大学の蔵書として吸収整理されており、受入時の事務書類なども存在しない。請求記号上から小山田与清旧蔵書を抽出することは困難である。

しかし、明治四〇年の高田早苗寄託書に限って、早稲田大学に寄託受入目録が現存しており、小山田与清手沢本や旧蔵書・関係図書が大半を占めている。本目録と現蔵書の突合によって、現存する小山田与清旧蔵本の存在を確認することができる。

小山田与清自筆稿本と思しき書物は他の図書館にも所蔵が確認出来る。国立国会図書館蔵『松屋叢書⁹⁾』は小山田与清に関する図書が集められた雑纂本で、装丁を鑑みるに後に台冊され、まとめられたものであるようだ。この中に『松屋外集』の自筆

稿本とおぼしき部分が存しており、少なくとも一部は小山田与清旧蔵書である。

他に東京大学総合図書館には、国書刊行会から発刊された『松屋筆記』の自筆本があったといひ、昭和三七年には東京大学国文学研究室が小山田与清自筆本『古与美宇多』及び六人部定香自筆『柿本人丸歌集考』の合冊本を購求している。^①また小山田与清の奥書がある『古与美宇多』も所蔵しているようである。南葵文庫旧蔵書中には小山田与清が編纂した『群書搜索目録』の写本と目される書籍が断片的に残されている。他に、静嘉堂文庫他にも自筆本と思しき書冊があることが知られる。

小山田与清旧蔵書には、しばしば特徴的な書き入れが多数みられることが知られている。太い傍波線、圈点、頭書といった書き入れの他、表紙見返しの問題や、表紙の直書の書名略号などが存している。版本や刊写本にもこれらの特徴的な書き入れを見ることができ、そこから小山田与清旧蔵本の書き入れを確認することができる。^②過剰とも思えるこの書き入れは『群書搜索目録』の項目採録に関わる記号で、検索のみを目的として、造本や本文への手入れを行っていた。造本や解題・考證めいた書き付けを含む、こうした手入れを総称して、筆者は「検索加工」という呼称を提唱している。^③検索加工を施した図書は書物の索引と一具の利用を想定していると考えられ、近世後期における索引登場以前の書物利用と明確な画期を示す事象として重要である。索引とその対応本文との関わりを考察する上でも小

山田与清旧蔵本の実態把握は必須なのである。

三 早稲田大学図書館蔵「明治四拾年六月調 高田氏寄託圖書目録」

早稲田大学図書館蔵「明治四拾年六月調 高田氏寄託圖書目録」(ト10-2692-22)を紹介する。これは明治四〇年の高田早苗の寄託書目録で、小山田与清関係図書が大半を占める。本書の存在については松本智子が言及している。

装丁は仮綴。型紙の表紙に簡易な背を付してホチキスで三箇所を綴じている。外題は直書で「明治四拾年六月調／高田氏寄託圖書目録／早稲田大學圖書館」と墨書。表紙寸法は三一×二一糎。本文料紙は二種類ある。一つは縦二八糎、横は表紙を閉じた状態で一八糎程度。四周単辺の朱野線の図書館用目録用紙二枚で、版心に「早稲田図書館」とあり、裏丁に「書名」「著者」「刊行年月日」「装丁／形状」「冊」「符」「號」の区分で野線が引かれている。匡郭は半面二・五×一六。五糎ほど。墨末尾の一丁は青野線の便箋で、縦二五・一×横一七。五糎、匡郭一八・四×二・二糎。奥に「早稲田大學圖書館」、「大正」「月」「日」が野線と同じ青で印字され「大正11年11月25日」の年次が書き込まれている。

朱野線紙は、高田早苗蔵書の受入目録で、青野線紙は展覧會用出納目録の、二点構成となっている。受入目録の本文は墨筆で、野線に準じて情報が書き込まれているが、ところどころ鉛

筆や朱書の書き入れ、刷り消しがある他、書名下に捺印と鉛筆でのチェックがある。出納や貸与などの時の記録と思しき、現在の配架状況とは無関係であるようだ。

受入目録に記される書籍の大半は、現在の早稲田大学図書館に所蔵が確認できるが、『老のくりこと』（一三号）と『諸家上書』（二四号）は同じ書名での所蔵が確認出来ない。『松屋棟梁集』は三箇所に出現し、三部四点になるが現存点数では三部三点である。書名とは別に、次のような受け入れに関わる書き入れがある。一部整理して掲出する。

計 貳拾四部 壹百二拾参冊

以上第二回分 計 二十三冊

以上第三回分 計 三部 五十四冊

このように、三度に分けて整理されたことが判明する。この受入目録には、全三九点の書目が著録されるが、末尾に鉛筆書で「松屋筆記」の書名だけが記されている他、表紙見返しや一丁目頭には薄朱の書き入れを水で消した形跡と、鉛筆での書き入れなど、寄託資料の受入や出納に際しての注記がみられる。

本書は、図書館の作業記録のような性質のものであり、公開を前提として制作されたものではない。従って注記だけでは詳しい事情が分からないが、おおよそ次のような事がうかがえる。まず、注記には鉛筆のものと蛍光ピンクのような色味の薄朱のものがあり、薄朱の注記は水で抹消されている。見返しの薄朱の注記は「返却」の二字以外読めない。これは鉛筆ですぐ近

くに「大正七年四月四日／高田氏今大坪忍／を経て／擁書楼日記／相馬日記／此外書全部返却」と書かれたものの原文だろう。一丁上欄にも「明治四十三年／五月高田氏宇都借^用」以下二行が水で消された薄朱書がある。これらの注記はおそらく高田早苗が寄託資料を賃借して返却した際のものと思われる。明治四三年、大正七年、大正八年に出納があったらしい。

著録書籍に関わるものとしては、『松屋雑考』『春二百首上』には「家集？」という疑問の注記が鉛筆で付されている。『棟梁集』でも「十二？」の注記があり、本目録の突合作業と頭書の著録とで冊数が合わないことがあったようである。末尾に『松屋雑筆記』を鉛筆書でしたためた後、「和泉君の記録に／雑書一筆とは／これならんか」とあるのは、受入に際して事前の調査を行った際の記録があったのだろう。

青野線紙のほうは、大正十一年に八王子で開かれた展覧会の出品目録であるようだ。この展覧会の詳細は未詳であるが、展覧会用として十一月二五日に高田早苗に渡し、大正十一年十一月三〇日に全部が返却された。十二月十四日に東京社史籍^部より問い合わせがあった由の注記が、この書目と直接関わるのかよくわからない。ここに掲出される八点はいずれも小山田与清の草稿本か手沢本で、与清に関わる展示と思われる。明治四〇年に寄託された後も本目録に基づいた管理が行われており、高田早苗の蔵書が小山田与清蔵本を含んだ重要典籍として活用されていたことがうかがえる。

四 早稲田大学図書館蔵小山田与清旧蔵書類について

早稲田大学に存する高田早苗の旧蔵にかかる小山田与清旧蔵書や自筆稿本は本目録に記されるものだけでなく、管見の範囲で以下の六点がある。請求記号と寄贈年次の印記は次のようになる。

『松屋反故集』八冊（イ05―01406）「昭和24年2月22日」

『松屋家集』一冊（ヘ04―05044）「昭和24年2月22日」
『知非齋日記』七冊（ヌ06―05757）「昭和24年2月17日」

『中古田制租法志』一冊（ヨ07―04160）「昭和24年2月22日」

『水葱考』一冊（ニ14―02292）「昭和24年2月22日」
『松屋歌文雑稿』一冊（ヘ02―01785）「明治四十年九月十二日」

『日本紀竟宴歌増注』一冊（ヘ04―01790）「明治四十年九月十八日」

いずれも与清自筆書入本だが、「明治四十年九月」の年次があるものとおり、六月調時点では漏れていたものの、直後に追加寄託されたものだろう。高田早苗の没後である昭和二十四年の年次が記載されている本もあることから、明治四〇年に寄託された資料の小山田与清旧蔵本の全てではなかった点、

注意を要する。

五 小山田与清展覧会目録

本目録以外にも小山田与清旧蔵書を知る事ができる資料がある。明治四〇年三月十九日に早稲田大学図書館で開かれた「松屋先生忌辰展覧会」には、『松屋先生忌辰展覧會之記』^①という記録が残されている。高田早苗寄託以前に小山田与清関係資料が出品された展覧会として、各書の所蔵者が判明する点で重要である。

冒頭には会記（署名なし）、当時の図書館長であった市島謙吉の挨拶状、陳列品目（二種）、参加者名簿、松屋小山田與清先生著述略目録、小山田與清先生年譜が付されている。会記によれば、午後一時に開会して午後五時に閉会した一日のみの企画であった。

この展覧会には高田早苗蔵書のみならず、他館や個人の所蔵にかかるものも展示されており、与清に関わる書籍の伝来状況をうかがうことができる。陳列品目には書名、分量、ものによっては略解題、所蔵者が記されており、高田早苗以外の所蔵者のものを抜き出すと以下の通りとなる。ただし、明治以降の翻刻である「（乙）活版本」と、直接与清に関わらない「（七）名家自筆之部」は除き、略解題も省いた。

（一）画像、碑銘、手簡、詠草之部

松屋先生墓碑銘 揚本 一幅 荒川信賢氏

松屋先生書牘 一軸 市島謙吉氏

松舎先生詠草 五葉 浅倉典声氏 富田冬三氏、荒川信賢氏

小山田與淑詠草 八葉 富田冬三氏《内三点》

松屋門人詠草 拾二葉 富田冬三氏《内二点》

香雪齋與清畫賛富嶽圖 一幅 富田冬三氏

擁書樓の記 岸本由豆流自筆扁額 一面 千葉鐘藏氏

(二) 著書之部 (イ) 自筆原稿

更級日記標註 一冊 荒川信賢氏

松屋雜考 六冊 本館 曾五九九

松屋筆記 自六十卷至百二十卷(内六十一、六十五—八十、九十三、壹〇—一百十四、百十六) 卷欠 廿八冊

東京帝國圖書館

日本紀竟宴歌増注 一冊 本館 利一、七九〇

小山田與清雜稿 一冊 本館 曾六一六

小山田與清歌文集 一冊 荒川信賢氏

老の涙 一冊 荒川信賢氏

吉田ヶ谷紀行 一冊 荒川信賢氏

交生草 十三冊 東京帝國圖書館

皇統緯諡考 六冊 東京帝國圖書館

松の落葉(自十三至十六卷) 四冊 南葵文庫

(二) 著者之部 (ロ) 刊本

鹿島日記 二冊 帝國圖書館

相馬日記 四冊 本館呂三三五

松屋棟梁集 一冊 本館曾五三

松屋棟梁集 一冊 富田冬三氏

松屋外集 四冊 富田冬三氏

竺志船舶物語旁註(村田春海著/小山田与清注/文化十一年

二月) 二冊 本館利八六一

十六夜日記残月鈔(小山田與清注/文政七年) 三冊 本

館利三一

擁書漫筆(文化十四年) 四冊 本館曾五五

俳諧歌論(文化九年) 二冊 帝國圖書館

百人一首讀書法 一冊 帝國圖書館

こよみうた 一冊 帝國圖書館

樂章類語鈔(文政二年) 五冊 帝國圖書館

賀茂真淵翁伝(文政元年) 一冊 帝國圖書館

墓相小言(文政三年) 一冊 帝國圖書館

(二) 著書之部 (ハ) 寫本

夫木鈔類標(地名) 三冊 黒川真道氏

夫木鈔類標(地名) 三冊 帝國圖書館

類聚名義索語(卷十一、十二、十三「ネ、ナ、ラ、ム、ウ、キ、

ノ、オ」) 三冊 黒川真道氏

群書搜索目錄 廿一冊 東京帝國大學圖書館

松屋叢書 三十冊 帝國圖書館

風病考並雜藝考 一冊 南葵文庫

鎌倉御覽日記 一冊 富田冬三氏

墓相口傳 一冊 本館仁一、四四四

(三) 自筆書入本之部

日本書紀 合本七冊 黒川真道氏

松のおち葉(写本) 二冊 本館曾六一七

各地に小山田与清に関する写本や詠草が残っていた様うか
がえる。富田冬三は高田早苗の母方の叔父で、高田早苗を養育
した人物だった。また、「本館」とあるように早稲田大学図書
館も与清の著作を集書の対象としていた。この「出品品目」に
は略解題が記され、詠草や画賛には翻字も付されている。この
中には「寄託目録」を補完する記述がみられる。たとえば(二)
著書之部(イ)自筆原稿部にみえる『うつ、物語』には次のよ
うな解題がある。

本書は當時書キ綴リシモノヲ十三年三月二屋代弘賢ノ
一見ヲ乞ハレシニ依リテ書ヲ加ヘタルモノナリ恐ラク與清
ノ処女作ナラン

これは末尾に付される小山田先年譜の記載とも符号する。展
覧に先立つて与清の著作・年表の調査を行ったのだろう。また、
この中には戦災で焼失した「東京帝国図書館所蔵『群書搜索目
録』廿一冊」や、関東大震災で焼失した黒川家の索引の出品が
含まれている点も注意される。とくに黒川家旧蔵『夫木抄類標
(地名)』の注には、

本書ハ或ハ夫木工師抄ト称スルモノヲシテ黒川春村ノ自筆
写本ナリ

とあり、さらにもう一点の帝國図書館蔵本の注には、

本書ハ前書ニヨリテ謄写セルナリ

とある。黒川春村自筆本は関東大震災で焼失してしまったも
の、春村自筆本が展示された記録として重要であり、また現
国立国会図書館蔵本¹⁸がその謄写本であったことが判明する記録
として貴重である。小山田与清の索引を部分的ながら春村が書
写していたことは、文化文政期から維新期にかけて大量に制作
・書写された索引の流通の点からも注意されるだろう。

また、昭和九年十一月二四日、東京神田帝國教育會館にて行
われた日本書誌學會主催第三回展覽會の出品目録である『(江
戸時代)書誌學者自筆本展覽會目録』¹⁹が残されている。吉田篁
墩以下二十五名の国學者たちの自筆原稿を集めた展覽であつた。
諸家略伝は三村清三郎、書誌解説は川瀬一馬が行っている。高
田与清の名前もみえ、五点(一点は蔵書印)が出品されたよう
である。書名と当時の所蔵者の名前を引く。

(八六) 擁書樓日記(寫) 十二冊 高田早苗氏蔵

(八七) 知非齋日記(寫) 七冊 高田早苗氏蔵

(八八) 倭学載恩日記(寫) 六冊 高田早苗氏蔵

(八九) 拾芥抄 三卷(刊) 六冊 松井簡治氏蔵

(九十) 高田與清蔵書印 一顆 三村清三郎氏蔵

松井簡治所蔵『拾芥抄』は刊本に与清が付箋や直書で書き入
れたもので、「塙氏温故堂所蔵慶長癸丑年五十川了菴寫本」等
での校正があると注される。「小山田文庫」及び「問宮之記」

等の印記から弟子間宮永好の旧蔵とされる。この本は静嘉堂文庫に現存する。刊本とはいえ、書き入れ本が間宮永好の手に渡っていた。彰考館文庫に蔵書を送る以前から、すでに与清の蔵書には書物の出入りがあったのだろう。

六 その他の小山田与清自筆稿本の所在

早稲田大学図書館には高田早苗の旧蔵ではない小山田与清圖書や関連図書がある。

まず『狭衣』八冊（ヘ12—04874）である。巻一から巻四までの古活字本『狭衣物語』で、七類の蔵書印をもち、田安家及び横山重旧蔵である。本書には膨大な数の傍破線、圈点、頭書をもっており、これらが小山田与清書入本としての根拠になっている。小山田与清旧蔵本に特徴的な、典型的な索引加工といつてよい。異本注記などは同時代の国文学者の所持本と共通するものが多い。しかし、与清自筆にしては書寫や頭書が丁寧すぎ、朱頭書や書き入れには細かい整理がなされているように見える。小山田与清旧蔵本ではあるが、筆蹟や形態から自筆ではなく門弟による書入移点本であろう。本書は弘文荘待賈古書目の一つである『敬愛書図録Ⅰ』（弘文荘、一九八二・三）に小山田与清校合書入本『狭衣物語』として紹介されているもので、図書カードによると昭和五七年の購求である。

もう一点は『老の涙』一冊（ヘ10—05453）である。『弘文荘待賈古書目第三四号』（弘文荘、一九五九・七）に掲出され

ているもので、売り立て目録では確認が難しいが、本の下部が山状に破損しているのを裏打ち補修してある。荒川信賢旧蔵で、先にみた明治四〇年三月十九日の展覧会に出品されたものと同じだろう。これらは高田早苗の小山田与清旧蔵本群の関連図書として購入された。²⁰

七 おわりに

本稿では高田家に残された小山田与清旧蔵本の様相を伝える明治四十年の高田早苗寄託本の目録を紹介した上で、そこから漏れた資料を知る上で有用であろうと思われる展覧會記録についての資料と、その後の早稲田大学の購求にかかる小山田与清旧蔵本を紹介した。早稲田大学以外の大学、諸文庫にも小山田与清旧蔵書が存することはすでに見たとおりである。

蔵書の大半を彰考館文庫に献上し「丸裸」の状態になったと言いつながら、なぜ自家に資料を残したのだろうか。本目録からうかがえる高田家に残された本の多くは草稿本、版下本、『松屋雜稿』のような断片的なノートが多い。最終的には刊行を目指していた与清にとって、自分の草稿などは献上する価値のないものだったのだろう。『松屋升堂名簿』のような門人録も献上すべきものではなく手控えの類であった。

ただ、田中本孝自筆の『添水塵芥』が本目録に存しているのは、実父の著書を手元に置いておきたかったという思いがあったのかもしれない。師であった村田春海の著者の評釈である『琴

後集序評』にも似た思い入れがあったものだろうか。

また『松舍翁七回忌追福和歌並傳』のように、門弟たちによる七回忌追善の書物が伝わっており、彰考館文庫への献上後にも松屋与清を慕って人々が集まっていたことをうかがわせる、目録中には与清の没後に高田家に入ったものもあった。

本目録は、早稲田大学図書館の蔵書として吸収された高田早苗旧蔵本の一部が復元でき、小山田与清旧蔵本の近代における様相を知ることができる貴重な資料なのである。

注

(1) 『古学小傳』による。また、小山田与清については、安西勝『小山田与清の探究』一〇五(私家版、一九九四・九九)、同『小山田与清年譜考』(町田ジャーナル社、一九八七)。蔵書については岡村敬二『江戸の蔵書家たち』(吉川弘文館、二〇一七)等の研究がある。

(2) 彰考館文庫蔵。函架番号：亥12784。東京大学史料編纂所にマイクロフィルムがある。請求番号：617031-5。

(3) 国立国会図書館蔵。請求番号：182-108。

(4) 前掲『小山田献納紀事』所収西野清六宛与清書翰控。松本智子注 (5) 論文に掲出。

(5) 松本智子『〈翻刻〉松屋蔵書目録』(早稲田大学図書館紀要、二〇〇一・三)。

(6) 潜龍閣文庫蔵『潜龍閣書目』。函架番号：亥9424～9429。

(7) 清水正健『改定水戸文籍考』(須原屋書店、一九三二)。

(8) 八潮書店、一九七七。復刻増補版。ただし彰考館の目録自体は複数存する。

(9) 請求番号：12833。

(10) 『松屋筆記』「凡例」(国書刊行会、一九〇八)。

(11) 請求番号：上代：1161。

(12) 請求番号：近世：3232。

(13) 山田洋嗣「南部家旧蔵群書類従本『散木奇歌集』の輪郭」(福岡大学研究部論集A、人文科学編)九一〇、二〇〇九・五、同「散木奇歌集『南部家蔵本』の背景——伝本の位置を測るために」(『日本語・日本文学の総合研究 準備号 言語研究と文学研究の「境界」と「越境」、二〇〇九・六)。

(14) 拙編「和漢仏書総合索引『文峰四臨』——小山田与清『群書搜索目録』——「解題」(ゆまに書房、二〇一九)。

(15) 注5前掲論文。

(16) 増田由貴「『図書館』における高田早苗と小山田与清」奈良美術研究、一八・二〇一七・三)。

(17) 請求記号：ト10-797-1。

(18) 請求記号19748。故神原芳楚納本。

(19) 川瀬一馬編『〈江戸時代〉書誌學者自筆本展覧會目録』(日本書誌学会、一九三四・十一)。

(20) なお早稲田大学図書館には、この他にも小山田与清に関連する書籍や図画像がある。一例をあげると、藤原盛章賛『小山田与清

肖像」(ヌ06―09403)や、『後樂園拝見記』間宮永好写本(ナ04―03391)、『濱の松葉』間宮永好写本(ナ04―03392)などである。その他に、小山田与清著作の版本や写本などが存するが、小山田与清旧蔵本の紹介を主とする本稿の趣旨に鑑み、本稿では省略した。

附(翻刻) 早稲田大学図書館蔵『明治四拾年六月調 高田氏寄託図書目録』

【凡例】 早稲田大学図書館蔵『明治四拾年六月調 高田氏寄託図書目録』(ト10―2692―22)を翻刻する。ただし、本来図書館内の事務書類であり、記号が複雑である点を鑑みて、罫線区分を規準に情報を整理して翻刻する。罫線区分は「書

名」「著者」「装釘」「形状」「冊」「符」「號」であるが、書名上部・下部に鉛筆でのチェック、書名下の印記などについては、別途欄を設け、項目に(―)を付して一覽する形式とした。また鉛筆、ペンによる書き入れや訂正については、末尾に「書き入れ一覽」および【注】の形で追加し、注の位置にはアラビア数字を肩に付した。

【本文】

明治四拾年六月調

高田氏寄託圖書目録

早稲田大學圖書館(外題)

	×				○ ¹							(頭記号)
宇治拾遺物語	相馬日記	伊勢物語傍注 高田与清書入本	濱のまつ葉	琴後集序評	律令便蒙	字都々物語 文化四年永代落橋記	字津保物語 卷二欠 田中衛麻呂校合本	擁書樓日記一名知非齋日記 自文化十五年七月廿九日至文政三年二月十四日	松屋藏書目錄	古言梯	倭學載恩日記	書名
万治二年初冬	文政元年十月	加茂季鷹 安永五年仲冬	小山田与清 写本	全	全	高田与清 著者自筆写稿本	小山田与清 著者自筆書入本	小山田与清	写本	楫取魚彦	小山田與清 著者自筆写本	刊行年月日 著者
全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	和	釘装
全	菊	全	菊	菊	菊	全	菊	菊	全	全	菊	状形
一五	四	二	一	一	一	一	二九	一九	七	一	三	冊符
一二	一一	一〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一	號
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	(下鉛筆)
	○		○	○	○	○		○			○	(下印)

「一丁才

													×	×		
松舍翁七回忌追福和歌並傳	百首三部合冊	故翁都の道の記草稿	和學載恩日記	計 貳拾四部 壹百二拾参冊 ⁴ ₅	諸家上書	堤防目論見必要 著者自筆本	松屋雜考	字音假字用格	小石川御園の記	棟梁集	全	松屋棟梁集	松屋叢考	松屋叢話	松屋外集	老のくりこと
					写本	写本 富田彦右工門	写本 小山田与清	本居宣長著 安永五年春	坂昌成 写本	高田与清稿 写本	写本	全	全	高田与清	高田与清著 田部寛徳校	成島邦之丞上書 写本
全	全	全	和		全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	和
全	菊	全	菊		菊	菊	全	全	全	全	全	全	全	全	全	菊
一	一	一	六		一	一	九 ³	一	一	十二 ²	二	一	三	二	四	一
利	利	呂	利													
二八	二七	二六	二五		二四	二三	二二	二一	二〇	一九	一八	一七	一六	一五	一四	一三
○	○	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
○		○	○				○			○	○	○	○	○	○	

「一丁ウ

松屋藏書目錄	七冊（印）	展覧会用として高田先生へお渡しの方
倭学載恩日記稿	六冊（印）	

松門倭歌談		全	菊	一	利	二九	○	○
松屋升堂名簿		全	菊	一	伊	三〇	○	○
春二百首		全	菊	一	利	三一 ⁶	○	
松屋文集		全	菊	一	利	三二	○	○
衣手日記		全	菊	一	利	三三 ⁷	○	○
扶桑拾葉集抄		全	菊	一	利	三四 ⁸	○	
添水塵芥		全	菊	一	利	三五	○	○
扶桑拾葉集抄		全	菊	七	利	三六	○	
以上第二回分 計 二十三冊								
松屋筆記	高田與清稿	和	菊	二〇		三七 ⁹	○	○
松屋外集〈初篇二十冊／二篇十七冊〉		全	全	三〇		三八 ¹⁰	○	○
松屋棟梁集 初篇		全	全	一		三九 ¹¹	○	○
以上第三回分 計 三部 五十四冊								
松屋（雜）筆記				二〇			○	○
（以下六行白紙）								

「二丁ウ

うつゝ物語	一冊（印）
濱の松葉	一冊（印）
伊勢物語傍注	二冊（印）
松屋叢話	二冊（印）
松屋叢考	三冊（印）
松屋棟梁集	三冊（印）
扶桑拾葉集抄	七冊
十九部卅二冊 高田先生寄託本中	

「三丁ウ

【書き入れ一覧】

見返し	大正七年四月四日／高田氏？大坪忍／を経て／擁書楼日記／相馬日記／此外書全部返却（鉛筆書）
見返し	「」返却（薄朱筆）
一丁才頭	大正八？（鉛筆書）
一丁才頭	明治四十三年／五月高田氏字都借 ^{冊カ} ■
棟梁集	（以下二行不明）（薄朱墨）

松屋雜考	十二? (鉛筆書)
春二百首上	家集。後樂園拝見記／反古集? (鉛筆書)
松屋雜筆記	家集? (鉛筆書)
二丁ウ	和泉君の記録に／雜署一筆とは／これならんか (鉛筆書)
三丁オ	大正十一年十二月十四日／東京社史籍「」の問い合せ来りたれば左の如報告す。／大正十一年十一月卅日 全部返却／八王子ノ展覧会へ出品ノ為ト 同卅日軸物六本帰り (ペン書)

【付記】

本文中、引用に際して字級数は揃え、割書は〈 〉で括り、判読不能は■、私に《 》で注記を付した。陳列品目の()は原本通りである。本研究は特別研究員奨励費(2100181)の助成を受けたものである。閲覧と掲載の許諾を賜った早稲田大学図書館に御礼申し上げます。

【注】

- 1 「×」を鉛筆書にして上から墨で「○」と書く。
- 2 「九」と墨で書いて鉛筆で見せ消ちにして「十二」と書く。

- 3 「九」と墨で書いて鉛筆で見せ消ちにして「十九」と書くか。
- 4 「二」を挿入する。
- 5 「壹」と書いて見せ消ちにして「参」と書く。
- 6 「一」を墨で二度書き。
- 7 墨消ちにして「三」と墨書で傍書。
- 8 墨消ちにして「四」と墨書で傍書。
- 9 「七」を墨で二度書き。
- 10 「九」と墨で書いて「八」を重ね書き。
- 11 「三九」と重ね書き。下の字は読み得ず。
(うめだ・けい／日本学術振興会特別研究員P D)